

日本の白鳥 Nihon no Hakucho (Swans in Japan) (30) : 84-85

<資料> 新聞記事から

### 十勝川温泉の白鳥飛来地観光協が独自長期計画

「餌なくとも集まる場所に」

(十勝毎日新聞, 2004年12月30日)

十勝川温泉の白鳥飛来地でハクチョウ、カモなどの野鳥に餌を与える行為について、同温泉観光協会（作田和昌会長）は独自に計画的な管理に乗り出した。30日から同飛来地に餌箱を置いて一定量（1日30キロ）の小麦を用意、餌を与える場合はこれを利用するよう観光客らへの呼び掛けを始めた。今後、長い目で取り組みを続け、用意する小麦も徐々に減らしながら、「最終的には餌をあげなくても集まる形を目標にしたい」（事務局）としている。（金谷信）

同協会によると、無制限な餌やりは野鳥たちの過度の集中を招き、鳥同士の病気伝染につながる恐れもあるという。今回の管理はそうした危険を極力避けるほか、自然豊かな温泉街を目指す同協会として「自然に少しでも近い状態で野鳥たちを見守りたいため」という。昨年の鳥インフルエンザ問題も契機に、地元の専門家からアドバイスを受けるなど検討を重ねてきた。

同協会によると、無制限な餌やりは野鳥たちの過度の集中を招き、鳥同士の病気伝染につながる恐れもあるという。今回の管理はそうした危険を極力避けるほか、自然豊かな温泉街を目指す同協会として「自然に少しでも近い状態で野鳥たちを見守りたいため」という。昨年の鳥インフルエンザ問題も契機に、地元の専門家からアドバイスを受けるなど検討を重ねてきた。

同協会として呼び掛けているのは(1)餌は原則小麦のみとし、現地の餌台に用意するものを利用する（1人コップに1杯、今季は来年2月末まで）、(2)小麦以外の菓子パンやスナック類、米などは絶対に与えない、(3)伝染病防止のため犬や猫などのペットは近づけない—など。これに伴い、これまで同飛来地の休憩所（売店＝同協会が冬期間運営）で扱っていた餌の販売は中止。休憩所の横には、餌の管理への協力やマナー徹底を求める看板も設置した。

同協会によると、温泉地自らの手によるこの種の取り組みは珍しいという。事務局では「例えば10年くらいの長いスパンで見たい」とする一方、「北海道遺産に選定されたモール温泉もいわば自然の宝物。これからも自然環境に配慮した観光地として、その姿勢をアピールしていきたい」と話している。

鉛中毒？ 中標津で白鳥2羽死ぬ 猟区の野付半島から20キロ  
(北海道新聞, 2006年6月24日)

【中標津】根室管内中標津町の民間非営利団体(NPO)「道東動物・自然研究所」は23日、同町内で狩猟用散弾銃の鉛中毒とみられるオオハクチョウ2羽とオジロワシを保護し、うちオオハクチョウ2羽が死んだと発表した。

同研究所の獣医師森田正治所長(62)によると、2羽は5月下旬、町内の沼で弱っているところを保護され、翌日までに死んだ。レントゲンで砂のうに散弾と見られる影がそれぞれ22個と8個写っていた。水鳥は、消化のため小石をのんで砂のうにためる仕組みがあり、誤飲したらしい。

オジロワシもレントゲンで1個確認されたが、環境省釧路自然環境事務所が治療し、回復した。

オオハクチョウが保護された沼から約20キロ東には、ハクチョウの飛来地なのにカモの狩猟が認められている野付半島があり、昨年、湿原や水鳥を保護するラムサール条約登録地になった際も一部は猟区として残った。

森田所長は「野付半島はタンチョウ、オジロワシの営巣地でもあり、鉛弾を自粛するか、猟そのものを禁止してほしい」と話している。